



# 男性養護教諭図鑑

レッツ発掘!

先生のご経歴を教えてください！

現在は、東京都にある立川市立西砂小学校という全校児童数700人規模の小学校で勤務をしています。養護教諭としての勤務は現任校で3校目。初任校は知的の特別支援学校、2校目は離島小学校、3校目が現任校となります。

また、養護教諭として働く前には、大学病院の看護師として病棟勤務をしていたこともあり、整形・形成・乳腺外科などの混合病棟で、7年間臨床経験を積ませていただきました。

看護師として働き始めて2年目の頃、東京福祉大学の通信教育学部へ3年次編入をして、2年間かけて養護教諭の教員免許を取得し、採用試験に臨むこと4回、無事に採用通知をいただき、私の養護教諭としてのキャリアがスタートしました。



Daiki Abe

## 阿部 大樹 先生

立川市立西砂小学校  
主任養護教諭

看護師として働かれています中、なぜ養護教諭を目指そうと思われたのですか？

高校時代、野球部のマネージャーとして選手のサポートをしていた頃の経験が、大きく影響しています。不意のけがをしてしまった選手のリハビリに手を貸したり、時にネガティブになってしまっている選手に寄り添い、励ましたり…。そういった関わりの中で、次第に選手が前向きになり、立ち直り、再びグラウンドで活躍することができた姿を目にした時、ふと「これを自分の仕事にしたい！近いものが保健の先生かな…」と。そういった思いに駆られたのは、高校3年生の頃でした。とはいえ、当時は男性の養護教諭は全国にわずか20名程度。採用や経済的な懸念もあり、まずは看護師として働き始めることを決めました。

“男性養護教諭 = 普通”

ここを目指して、まだまだまだ僕にはやるべきことがあります！

大学病院の整形・形成・乳腺外科看護師としてのキャリアや、離島小学校での勤務経験などをお持ちの阿部先生に、今回はお話を伺いました！

看護師経験が、養護教諭として勤務される中で活かされていると感じられることはありますか？

めっちゃめっちゃありますね。(笑)やはり、緊急時の対応には物怖じすることがまずありません。初任として1校目の支援学校に赴任した際にも、臨床経験がある分、周囲からも医療面に関しては一目置かれていたなと感じます。

また、複数配置校で相手はベテランの方でしたが、やはりけがや病気のことは私に積極的に意見を求めてくださったりして。そういった中で、「互いに助け合う関係」が経験年数の垣根を超えて自然と生まれていたなと感じていました。やはり、こういったニーズに応えることができたのは、看護師としての臨床経験が大きかったのかなあと。

<今回のインタビュアー>

妻鹿 智晃

(帝京短期大学 講師)



仕事に取り組み上で、先生が大切にされていることを教えてください。

初任の頃、とある養護教諭の方に「学校は病院じゃない。あなたがやっていることは、養護教諭としてのものではない」と指摘されたことがあった。当時は、ただただ「悔しい！」という思いでいっぱいでしたが、経験を重ねたいま、すこく納得できることがあります。

学校って、社会の縮図だと私は捉えています。例えば、授業をとおして勉強をすることは、子どもたちにとっては仕事だと思っんです。…では、「保健室って、何だろう?」「と考えると、病院やクリニックだと思っんです。そこで、ただただ処置を施すだけだと、たしかに「医療」ではあるけれど、社会の縮図として「教育」に落とし込むとすれば、やはり子どもたちが適切に医療に繋がることができるようスキルを身に付けさせることが大切なのではないかと思っんです。

子どもの救命率を上げるために、医療的な早期介入がいかに重要であるか。そういった視点からも、自ら症状を訴え、適切に医療を受ける。時に、自らできる処置があれば、主体的に取り組むことができるよう、サポートを行う。そういったスタンスを大切に、子どもたちと関わっています。



現在、先生が特に力を入れて取り組まれていることを教えてください。

今は、ICTを取り入れた教育に力を入れています。過去に離島勤務をしていた私は、本土の学校への転勤を機に、自分が思っている以上に教育

現場にICTが浸透していることに気づき、驚き、そして焦りました。職員会議や校内研究で専門用語を言われても、全く意味が分からない…。

私は、養護教諭の仕事は素晴らしい仕事だと思っっていて、もっと認知度も地位も向上されるべきだと思っっています。そんな中、養護教諭が「ICTは苦手だから保健室では取り組まない」と決めかかっってしまうと、周囲の教員から取り残され、更に溝も深まっってしまうと感じましたし、自らのあらゆる発信につなげるためにも、ICTに関する学びを進め、少しずつ活用を始めました。

実際に使っってみて、不登校のリスクがある子や支援が必要な子に相性がとても良いと思っった印象を受けました。話すことを苦手とする子が、タイピング(文字)で自らの想いを打ち明け、そこから潜在的なリスクを見つげ出すことができ、適切な支援につながる、といった事例にも実際に遭遇しました。

また、今まさに「オンライン保健室受付」的なものにも試験的に取り組んでいます。保健室入口にPCとディスプレイを置き、校内ラウンド中も画面越しに入室した児童との会話ができるようになっにして、遠隔での対応を図る。思ったよりも、子どもたちが私を探して校内を歩き回ることが多く、そうなるも職員室の先生方にも手間や迷惑をかけてしまう場面が増えてしまっんです。本当に重傷者が出た場合は当然対面での対応が迫られますが、軽微なものはどうした対応もできます。



今後も、「保健室でこそ取り組めるICT活用法」を自分なりに見つけ出し、その在り方を模索しながら、積極的に実践へ落とし込んでいけたらと思っっています。

最後に、先生の養護教諭としての今後の展望をお聞かせください。

離島小学校で勤務をしていた頃、ある3年生の男子児童が将来の夢に「養護教諭」と書いたんです。少なからず、私の影響はあったのかなと思っんですが、その子が将来、22歳とかで養護教諭の採用試験をいざ受けようとなっった時に、普通に働けるような社会にしたいなという想いがあります。現在、私は単数配置の小学校で勤務していますが、中学校や高等学校でも、今後勤務してみたいなと思っっています、その子のためにも…。

私みたいに、「この養護教諭の仕事がかっこいい!大好きだ!」と思っ子が、シエンダーバイアスで働くことが難しい世の中ではなく、**ある意味普通に働けるようにしていきたい**と強く思うので、様々な校種の単数配置に、男性の養護教諭として挑戦していきたいと思っっています。



【レッツ発掘! 男性養護教諭図鑑】  
発行: 男性養護教諭友の会事務局  
編集: 長野 雄樹 (名古屋市立西特別支援学校)